
Something New

オーシャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Something New

【Nコード】

N1403E

【作者名】

オーシャン

【あらすじ】

『……あるいは“林”から“竹”を連想したとしようよ。それは文字面からだろうとなんであるうと、そういった動機は抜きにしてもかく“竹”を想像してごらん。そこから“何か”が生まれるに違いないよ。例えば虎とか殺人現場とかね……』日輪に“何か、新しいもの”を見出して来日した米国人の男女。やがて二人の齟齬が現前とする。

1から2プラス閑話旧題（前書き）

申し訳ございません。

1から2までは4ノ23にupしていたのですが、一話完結という手違いをしてしまい、閑話旧題を付けて新規にup仕直しました。

1から2プラス閑話旧題

今日風日好 今日 風日 好ろし

明日恐不如 明日は恐らく如かざらん

擬古 ―古のうたに擬えて― 李白

1

「まるで僕はキャリーの車輪ですよ」と彼は思っている。
なるほど車輪だ。

成田空港第一ターミナル南ウイングでのジョージはまるで、
のように丸まり女の荷物を飼い且つ支配されていた。 僣僂^{せむし}

彼が前の尻の上に釣られたiPodからは何も聞こえない。ただ
彼女の耳^{みみ}に音無しく収まっていた。事実マーサーにしたらイヤリ
ングの代用でしかなく、その限りサングラスと大差ない扱いである。
「そもそも僕が荷物を引き受けなきゃ、彼女だってあんなにc o o
lでいられるわけがないんだ」彼はダイアログとか問答なんかとは
縁の無い国の人らしく考えた。「それからなんだって、あんなに“
アメリカ”するんだろうか？」

夏の日が長いのに空調の冷気が女につらい。それでもマーサーは
ほとんど日本ご用達セレブの“成コレ”よろしく、氷結した破顔の
ままだった。

しかし彼女はそれでも現実の人である。

「ねえジョージ。“手打ちうどん”って知ってる？」彼女は言った

「“実演” Demonstrationって書いてあるわ」

.....。

兎も角、彼らは日本にいる。アメリカは西海岸。お品書きにあり
そうな、“燻しオレンジ”色の太陽の沈む街から、はるばるやって
来たわけだ。

蝉時雨 せみしぐれ

破れて招く（やぶれてまねく）

木下闇 こしたやみ

……と今朝ジョージは二人が起居するウィークリーのアパートで、“金鳥”の蚊取り線香を焚きながら、端近で風鈴と虫のすだく和音に気もそぞろでいるうち、目近に迫る暑中の脈の白く高い青葉が、さやかな風と微温的な郷愁を彼に送ったが、それでも混淆こんこうして紛うことないランスタンの蠱惑こわくな香りが彼の氣に障った。

「風流とは“何か”に氣遣いするということじゃないかと思うんだ。例えば“森”という字と“林”という字があつて、ちょうど雨の切れ目に立ち会えた時のように、一株落ちたその瞬間をたまさか見れたとしようよ。そうだとすれば、僕は“何か”を感じるに違いないよ。寒いとか、さみしいとか」

マーサーは四つ足の短い方形のテーブルに残る、背の高く括くれ（くびれ）のある温氣うんきで汗がびっしりなグラスを最前まで載せていて、今はお役御免のコースターの輪の曲線を、ラメで目も綾な指先で痙攣けいれん的に出鱈目に切っていた。

「Umm・あるいは“林”から“竹”を連想したとしようよ。それは文字面ひじきからだろうとなんであるうと、そういつた動機は抜きにしてともかく“竹”を想像してごらん。そこから“何か”が生まれるに違いないよ。例えば虎とか殺人現場とかね。だけどそれは自然な……天然の果実を見つけたようなもので美味しくいただくか唾棄するかは価値決め云々の問題さ。ねえマーサー。ところが君ときたら、この夏の盛りに、それも日本の夏の盛りに秋冬用の紛々たるものを匂い立たせるわけだ。風流が兎角というよりも趣味の甲乙なのかも知れないね。いやまったくー」

「ところがあんだときたら」彼女はコースターの曲線を拭うと、次いでイヤホンを耳朶に嵌めて、チューナーを合わせるようにジョージの危篤患者の心電図の抑揚を持った音域と、耳元にいるパンクロ

ツカーの切れない癲癇の脳波に似た“こぶし”との調和にてんてこ舞いだっただ、いよいよ堪えきれなくなった。

「わたしがひさし髪にしたのにも気付かなかったでしょ？それとも人を選ぶのかしらん……お点前とでも或いは神父の肥えた桃色の肉叢^{むら}とでも例えてみようかしら。あんたのこと」

「ところがだ」彼はほとんどジェリーのトムに対峙する際の脅^{いふく}力の余らせ方で言った。「僕はとくに気付いていましたよ。君がひさし髪にする前からと言ってもいいくらいにね」なるほど彼は事前に承知していて、それは予測以上の確実さではあったのだけれど、かといって予知とかイタコしたとかではなくて、世界中の国政選挙で人民某党が勝つのが開票前に“当確”という意味で、である。しかし彼のつぶらな瞳（彼が他者に与える印象の凡そ半分はこの瞳が領しているのだ）の下にうつすらとしかし確実に隈^{くま}が露出し始めていて、それをマージャーは女のメイク落としてののびきならぬ事情や手管で発見し原因も素早く見抜いた。

「可愛そうなジョージ。ひねもす心理カウンセリングに勤しむジョージ。無報酬、無効果、無資格のジョージ。でも本当は」彼女は言った「あなたにこそ必要なのよ、カウンセリングが。それも週に八日のコースね。でもその意味は、あんたが“八日目”にずっと生きているというのと、もちろん関係ないわ」それからちよいと科^{しな}を作り、勝ちさびに言った。「目八口“ヨリ”モノヲ言ウ」ってこの土地の言葉よ」

ジョージは「心の貧しき者はー」という警句に魅力を感じたが言わなかった。それはマージャーに信仰を期待できないのと、そもそも自分が無神論の信仰者ということを思い出したからである。

閑話休題：その昔に私が生まれた土地にあつて一時浮かれたように通ったことのある、鄙^ひびた天主教の長老派教会を思い出した。（そこは三階建てで一階が待機室、二階が礼拝所、三階が牧師一家の自宅といった造りだった。）そのエントランスには、十一献金用の簡単な造りの函と献金者の記帳ノートの混み合った場所に、今月の

行事と題字された「福音通信」があつて、その裏表紙に決まつて「使徒信条」が箇条書きされていたのだが、肝心の内容は全く思い出せない。

ただ水曜礼拝の夜の部が終わり、牧師一家の夕餐のお招きも恭しく（いかにも！）断わつた後、見舞客のもういない、まだプライムタイムというのが嘘のような総合病院の静けさに似たエントランスまで、牧師が見送りに一緒に降りてきた日のこと。大袈裟なつくりの（それは門を抜くように出来た自家発注の木戸で）出入り口を蝶番の凄（つがい）い音に改めて驚きながら出ると、足下から夜気の煙嵐（えんらん）が上がつてきて、それでかえつて私の注意が夜空に向いたのだった。

金平糖の白いのばかりが、冬の澄んだ空にクルクル回つてるように明らかな晩だった。

私が「先生。映画でよく出てくる“告白”する……そう狭くて出窓がバカに高い所にある部屋の、それから中仕切りがあつて、その小窓が開くと格子の向こうに先生がいる、それで『汝の心を平安にして』云々ところ信者に話し掛ける部屋がありますよね。あれつて此処にはないんでしょうか？」

「それはきつと“告悔室”のことでしょう。カトリックでやるんです。うちはプロテスタントですから……でも悩みがあるんでしたらお伺いしましょうか？」そう言うつと牧師は眉間に小皺が川の字になつて、スガ目で言つた。「でもMさん。私はあなたを信じません。それでも本当の事を教えて下さいと言わなくてはいいけません」

日曜日の主日礼拝は午前の部と午後の部の二本立てのプログラムで、私は午後のそれも遅い時間になつてから参会するというのが常であつたが、はじめて現在の妻（さい）を連れ立つて教会へ訪れた日のこと。その日見習い牧師の歓送迎会を兼ねた青年部による催し物があつて、讃歌集を小脇に手を叩いたり床を蹴つたり口から種なしパンの残滓（ざんし）を飛ばしたりといよいよ宴もたけなわといった時に私たちは合流した。

すると一同水を打つたように静まり、それも「どうぞお氣遣いな

さらないで。わたしたちは赤心せきしんよりあなたがたを歓迎し主の導きを感謝し、交わり、愛します」といった風に、私たちのうちで彼女の方を顧視しつつ微笑むのだった。

過日彼女は私に言った。「寒イボが立ったわね。本当に。男のあなたには分らないでしょうけど、私にははつきりと聞こえたわ。

『Dカップのくせに』とか『スッピンなんていい度胸ね』なんてね。アイス、アイズとウォーミング、ハーツの片手落ち」

身廊しんろうを挟んで緋のマットが敷かれた長椅子が二十足らずあり、一同其処こゝに牌はいの一索いそくのように腰掛けると膝の上で旧約聖書詩編を開いた。

その日限りで牧師見習いが説教の弁を執った。

問わず語りそのまま、抑揚が跳ね声も高く五月蠅く感じるだけだった。

“主の祈り”も延びていた。

説教が終わると青年部の選りすぐりの男女が、エクボとニキビ面にとびきりの笑顔で花束を贈呈した。百合の香りが胃にむかついた。と、舞台正面奥の壁に花綵はなづなで飾られた十字架が、黒の法衣を纏った牧師の身体で隠れた。

「改めまして。皆さんこんにちは」こんな時の牧師は気分が上々な井上陽水を思い出して下さい。「本日は研修で一年間おいでになって、私も大変頼りにしていたP君とお別れということと、また新しく研修でおいでになったKさんの歓送迎会ということで、少し時間が押してしまいましたが一」

こういった懇ろ（ねんごろ）な挨拶の後には定まって、話者は急に真剣になるものです。残暑の体育館に逼塞ひっそくした学生諸子を望見して、学期初めの垂訓をする校長先生を思い出して下さい。

「ローマ書第二章です。『サレバ凡人ヲ裁ク者ヨ、ナンヂ言ヒ遁ル、術ナシ、他ノ人ヲ裁クハ、正シク己ヲ罪スルナリ。人ヲサバク汝モミヅカラ同ジ事ヲ行ヘバナリ。カ、ル事ヲ一』」
イスカリオテのユダ。

牧師がこのロマ書の件を話題にした時、私はイエスを磔刑にしたユダを意地悪く思い出さずにはいられなかった。しかし私をこんな気持ちにさせたのはイスカリオテのユダではなく、いま捷前で口角泡を飛ばす下町の牧師、その人だった。

……………。

自前の指頭の渦輪に目眩を起こしてしまったように、東京郊外を一寸奥に入ったところの、車窓に流れる鄙びた風光に連れられて、すつ頓狂な鼻唄を諳んじては愉快になりつつ、土曜学校の出張だというので牧師夫婦とその連れと一緒に老人ホームを訪問した日のことだった。

敷地全体が名無しの森に抱かれ、馬車廻しの中島で飛沫を挙げては色の少ない虹を手が届きそうに架ける噴水が暇なくて、かたや遠くで櫛比する春の日の木立は空と同じ高さで森としていた。

総二階で白亜の建物に入った。

屋内はフラットフロアーに何処までも手すりが廻らされていて、ドアはすべて引き戸だった。

ゲストルームに通された。

短髪に色黒で当院の銘と紋がプリントされたシャツを糊の効いたズボンにすっかり入れた還暦前の男が、五分きっかりで早歩きに手を揉みしだきながら入って来た。

院長だった。

際会した面々と通り一遍の挨拶を交わすと我々を残してすぐに部屋から出て行った。

「あの方は非常に熱心なクリスチャンなんです」牧師は言った「それで時折お声を掛けて下さるんです」それから続けた「まず、言うまでもなく」

それは恰も内から硝子が割れたので、外で石を探す人のようだった。

小会堂は一階南表の角にあり、吹き抜けで、スケルトン階段を二階部分のルーフバルコニーに接続し、その向かいにステンドガラス

を縦に細く平行に採って、天井は勾配だった。

その下で縦横に列を組んだ長テーブルの上に間隔を空けて名札を配り、椅子には名前と照会しながら名々のクッションや円く切った花ござをホームの職員が敷いたところに、牧師夫人とその連れと私とが案内した入所者を迎え終わると、其処に五分きっかりで牧師は詰襟に筒袖のユニフォーム姿で入って来た。

「皆さんこんにちはー」

眼が不自由な女性と耳の遠い女性の間で付き添って、牧師が「マタイ伝二十一章十四節です」と断わりを入れると、私は当該のページを開き牧師の後に復唱しつつ指でなぞる、といった仕事だった。

ややあつて、目交^{まなか}を紙飛行機がよぎった。

和紙で編まれた入れ子に新聞のチラシがたくさんで、退屈した時間の間に合わせに入所者から少し離して置かれていた。紙飛行機はそのチラシの工作物だった。また飛んで来た。出処は斜め後ろで、ずっと離れていた。其処には体格の良い、健啖^{けんたん}そうな団塊よりも年が上であろう男性がいて、担当の職員が“声掛け”をすると「はい！はい！」と言うと、すぐ手遊び（てすさび）を始めるのだった。また来た。彼は莞爾^{にっこり}していた。私は誰にというのでもなく秘密に開いてみた。折り目が強くしつかりした作りで、チラシは「得の市 毎月一日の 得の一 安いよ安いよ 得の……」と五色で刷られていた。と、彼は目を挙げた。天に投げた。が、ステンドガラスの聖母子に当たると燕返しに揺れながら、また私の元に落ちて来た。

開いた。

「SECOND LIFE 新しい人生 新しい住い 新しい二世帯住宅 週末は緑道に面したウッドデッキでご家族揃^{ぞろ}つてのバーベキューもー」

いつか散会になっていた。

私は車をまわすのに一足先にホームを出た。

屋外は中天の日を享けて駐車場の礫土に点綴^{てんてつ}して生えた雑草は歡を尽くしていた。

車を入りに付けたのを報らせに戻ると、風除室につながる出口で牧師は足止めされていた。

肉付きの良くしかし思い詰めたような初老の女性が、ほとんど我が事のように密やかに聞いた。

「ユダは赦されたのでしょうか？」

牧師は直截ちよくさじに言った「いいえ、赦されて“いません”」

「それは“まだ”ということでしょうか？」

「“これから”でしょうね」

この哀れな初老の女性は二の句がもう出なかった。

“これから”という頑迷さと“でしょうね”という距離の置き方を緬い交ぜにしてしまう鮮やかな遣り口が、彼女を尻込みさせたのに違いなかった。牧師はかたばかりに使徒行伝からそれらしいものを引用して付言したが、彼女は不安を隠せず空で聴いていた。

しかし、それでも傾聴するべきだった。

結局牧師は直截的な言葉の端々に、またなぐさみという“行為そのもの”にも、「そんな不安なんて自分で拵えたもので、なにもあなただけが特別というわけでは無いのですよ」という文あやの濃い（こまい）了解を織り込んでいたのだから……。

牧師夫人と連れとはその間ずっと蝶々しかった。

院の門扉の前の緑道に面して品を展げていた地元農家の直販所で、昭和の映画ニュースに撮られていた女学生よろしく、季節の野菜をいちいち手に持っては愛で匂つても賞でといった風に。

私がそんな光景をふたつながらに観ている内に、花壇で一本の支柱に忍冬の金色こんじきなのと白いのと一緒にいるのが目を射ると、こんな考えに捕われた。

「開かれた皇室、余暇的自由、こんなものは契約の定款に拘泥する中東以西の神話だ」

……。

午後の海があった。

入り日が遊弋ゆうよくしてズボン皺の縞をにっている。

その腿の上で彼女は手遊びを始めた。

私が黒目を流して見た彼女はちゃんと顔が牧師に向いている。
でも彼女は知っている。目尻が莞爾かんじしている。

手を払う。また来る。また払う。その手を攫まれて彼女の腿に運ばれる。

誰も払わない。私も払わない。どちらの手もそのままになった。
百合の香りも醒めてきた。

手は“秘密”ににっついていった。

主の祈りが彼岸に聴こえる。

「天ニイマス我ヲノ父ヨ、願ワクハ御名ノ崇メラレン事ヲ。御国ノ来ランコトヲ。御心ノ天ノゴトク地ニモ行ワレン事ヲ。我ヲノ日用ノ糧ヲ今日モアタエ給ヘ。我ヲニ負目アル者ヲ我ヲノ赦シタル如ク、我ヲノ負目ヲモ赦シ給ヘ。我ヲヲ試ミニ遇ワセズ、悪ヨリ救イ出シタマヘ」

牧師は掌を仰向けにして両手を差し出した。

「主ト子ト御霊ノ親シキ交ワリ」《教会の教の字は“協”のほうがりしくりますね。十字に主と子と御霊の三位一体。どう思いますかMさん？》

「アーメン」

会衆の調和と歎声の坩堝じゆりやうの中、私の恍惚きうことはどこまでも落ちることだった。

.....

「Mさん」牧師は言った「否定なさらないのですね」

こういった“慇懃無礼”さにはまったく閉口してしまう。

“否定しない”とは.....私にはつきりと肯定したのだから。

「きつとあなたはこの先で“落ちる”でしょう。それは勿論キリスト者の王国というわけではなくて、ちょうど日輪の落ちるように」
牧師はほとんど囁ささる（さえさず）ように言った「罪というのはいつでも洗神せんしんがはじまりですから」

「それでも罰が先に来ることはしばしばでしたよ」私は空目で牧師

を見て言った「それはなにも私に限らずです」

菓子に甘露が欲しいと思えば冬の夜空なのに遠雷が動もした。

1から2プラス閑話旧題（後書き）

閑話旧題が長過ぎた（笑）

待ち合わせる都合もあって、ふたりが日本に発つ前日になると、ケータイに送られて来た一枚の写真でマーサーを確認したのだ。無垢材の白いドアに番号が振られていそうな閑静な家並みが見えず目立って写っている。向こう正面の遠くの方に、夕焼け雲が棚引いていた。町の東西を一気通貫した住宅道路があつて、その入り口の方角に走って行く道が、画面の下部の端ほとんど脇から延びて途中下り勾配の為に急に沈みながらも、ケータイ画面の中の平らかな世界では、残された道が唐草模様の線分のように直ちに空に架かつて見えた。実際の道は下った先ですぐ三桁街道に変わりやがて国道に接続しとうとう西海岸へ出るのだが、そこであの燦しオレンジの日輪がその暮れなずんだ色の何条かを散らしはじめる時間に、自宅の前路肩の脇で外灯の括れに腕をまわし、光背を帯びてカメラの前で科しなを作るセミロングでライトブラウンの髪の若い女が——その細くしかし豊かな髪はゴム蝶で小さく一つ団子に結われて、余った後髪の前筋に残ったその毛先は黒く——画面中央から一寸はずれて写っていた。確かに夕さりの雲らしい雲は彼女から遠くの方でずーと横に長くなっているが、しかし同じ落日の日が一瞬間に——今日も誰かがスピードくじの的あてにする三桁番号のルートとその路上の吐瀉物や、番いが行方不明な軍手や、ナンバーが彼氏や彼女の名前のピックアップが立てた塵埃、そういった普段は隠れた種々に中り暴露し身をやつしてなお元気に燃える一挺の正体で——彼女を逆光で照っている。そんな当たり前な静止した運動が彼女の姿態よりも先に彼の何かを捉えた。それはジョージのほとんど痼疾こじつと言えそうな、しかし白粉の脂粉のように白くても濁りのあるどこか放恣な彼の肌から香ってくる意外な磯の匂いの原因が、あの画像の裡に隠れた日輪の沈む先に直接因るからだろうか？それともケータイ画面に写っていた彼女の、いま空港でジョージと出会ったマーサーと同じく、正面を

向きオーブンフェイスで目尻の皺の寄り方に明るい老後をはつきり約束された、思いのほか平均よりかずと上等なR-17の女であったこと。それが厚ぼつたい下唇から顎の先端まで気持ち長い、笑うとやや口が開き過ぎてしかも上唇が捲れて小さくみつ口なところや、すぐ青くなるひげの剃り跡を、よくこういった人間にありがちな落ち込み方に似て、ジョージは手自から臆病になるからであるうか？……「地の髪は黒いのよ」と、マースーは引き継ぎの申し送りのように言つた「今朝起きて熱いコーヒーを沸かしながら目玉焼きを“箸”でつついている間に思い付いたの。せつかくだから日本人の女の子になつちゃえつて。それで文具用のハサミで前髪をAラインにしたあと、脇も揃えて流してみたわ。そうしたらなんだか東洋書籍専門の古書店にタグなしオーブンプライスで剣呑に平積みされた『本朝美人見本』に『太鼓橋の欄干に手を掛けて隅田の夜長に涼をとる』なんて糸綴じで収録されていた日本の女の人みたいじゃない”and She goes… and She goes……

……。お下げにした前髪は定規で線を引いたようにカットされていて、窪んだ場所で瞼が深く別れ、鼻筋がすつきりと通り、しかも口唇は薄いので、顔の材料だけが表情不明にアイ・マイ・ミー・マインという風に暖簾から躍り出たようだけど、東アジアの女、その娘のどこを見ても扁平といった印象の残る女しか知らぬ彼には、新鮮なしかし或る位の高い数字を扱うような不安と胸の高鳴りを覚えさせた。例えば顔全体を縦に半分に裁つて、改めて右左の目口鼻の高さを揃えてから再生しても、裁断する前の顔と寸分違わないであろう、とイクスキューズなしで思わせるような整い方であった。キヤップ帽の庇の下から、そんな彼女の外向き（よそむき）ともフランクとも取れるような、一人っ子で、かつまた、鍵っ子の抑揚のない一本調子で早口なイクスキューズに彼はただ目礼だけして、“This way please”という風に歩きはじめた。が、あの驟雨の足下から降つて来るような不安が、二六時中、彼と世界を一筆の土地で隔てていることに、気付かないジョージでもなかった。

かたやキティーがデコレートされたショッキングピンク色の中国製ポーチの中にある、七色のコスメを内緒で数えるマーサーであった。

二度目の機内食の時間がエコノミーの搭乗者向けにアナウンスされると、ジョージは自分が空腹であったことにわづらしそうに気付いた。搭乗してからもしばらく経つまで隣席のマーサーが ” s i g h ” 一つでもするとボクシングのピーカブースタイルのようにボタンアップのシャツに首をずんぐり沈めてガードを固める有り様であった。そうしているうちに最初の機内食が配膳されたので、サイドメニューのマカロニサラダからマカロニを大皿のカープに寄せ、それからコーヒーにミルクだけなとて用を足してしまい、いい按排に茹でられた食品見本のような小エビをホワイトクリームと搦め^{から}たシーフードサラダは一切手つかずのままにした。「昔まだ私が小さい頃に、パニック映画のテレビの再放送で機長と副操縦士の全員が賄いに毒を盛られて殺されるところを観たことがあるの」「マーサーがちょうど s h o j o m a n g a の表紙よろしく小鼻を親指で掻く仕草で P a u s e しながら言った「まさか “ Y o u g u y ” も同じ再放送を観ていて時節柄用心しているのかしらん？」禅の有名な格言を実践するかのように、大仰にスプーンとフォークを両三度かち合わせて「ほら御覧なさい。ただ黙って待っている間は相手だって何も応えはしないわ。例えばエボニーとアイボリーを会わせて初めて満足のいく音楽になるように、そうするのよ」「ジョージの小エビを、スプーンの背とフォークの縁で挟み余分なソースを篩に掛けて落としてから、自分の綺麗に掃けた角皿の上まで運び終えると「だからどちらが音を鳴らしたのかなんて問題にならないわ」とシリアスフェイスで小エビから視線を逸らさずに断りを入れて、それから舌で掬った。彼女は舌とか咀嚼でというよりかは猫のように、あるいは要介護者のように大真面目に嚥下した。「私の素^そになるの」「マーサーは言った「何でも私の中に入るものが……そう感じていたいよ」「彼女は自分で引き受けて言った「残酷なことに。で

もそんなに単純なものじゃないって頭が先に知ってるわ。『互いに素』って分かるかしら？関係以前ってことなのよ」ジョージは自分の思案顔が彼女にそう言わせたのならば、と済まない気持ちになつたのと、女の喉仏が男のそれよりも特別に複雑な仕事をするわけではないことに不思議に気の毒に思えた。「だから全部忘れて」マーサーは手元の紙おしぼりで口を拭うと忘れることを自分では諦めたように言つた「とはいえ、出会う前に戻るなんて出来っこないわ。全部足し算して新しいものに、なる、ほかないのよね。事実、事実、事実」マーサーはトレイを下げさせると、化粧室でした七色のコスメを落として、客室でハリウッドのセレブ連がお忍び用にするスツピンに近いお色直しをはじめた。しかし今はジョージとの夜はむしろ確実になつたと感じるのだった。

深更。雨が小止みになるのを待つて、千切れになった水玉が砂壁のように散らされた路面に、弟のママチャリを内緒で借り（サドルの高さが一杯に降りて、平行だったハンドルバーはM字に曲げられていた）タイヤ痕を稲妻に引きながらコンビ二へと出掛けて、春雨スリーブとセブンスターを買い、親の気分的な還暦が来るまで間借りした京間の和室に直帰すると、座面がコットンテープで編まれたロッキングチェアに腰掛けた。

——棋譜並べのしばらく指していないままあつた。そよとの風がこつそり三五歩を成り歩に変えてしかも妙手である。そういう家具調度の動かし方を日中の母親達にも出来るらしい——

隈曲くまみのある床の間には、玩具のクリスマスツリーが置かれていて、ブリクラを銀紙に凝った風に連ねて貼付け、それが何本も襷掛けにされている他に、七夕を凝らした短冊が飾られていて、初めて招いた知人達の、丸字なエキストラマークの多い意外に謙虚な等身大の願掛けがされていた。脇の違い棚には、当たり前前に写真立てと糊の弱くなったクラフトテープで封じられた十萬円貯金箱と小物入れと一二センチの帯なしCDジャケットとその中身などが台風一過のように散らかっており、地袋の上には小型の冷蔵庫が置いてあつた。そこに容れておいた750MLのコンビ二白ワインを聞こし召めそうと膝を送つて行く途中、貼られたシールの虹色に反射する裸のデイスクが目を射ると、モノクロ映画の旧作DVDを七泊八日で借りていたのに三、四日塩漬けされていたままの事を思い出した。なんでもヌーヴェルヴァーグ右岸派の小津をリスペクトしている巨匠の誰それが若い頃に撮った作品で、長身の全裸の女がくわえタバコをして、便器に座り大喝するのが記念碑とか金字塔とか……ともかくグレイテストヒッツ的な呼び込みがされたのを、月一で発刊されている老舗ファッション紙で組まれた『彼女たちの時代』という実業

家でもファッションデザイナーでもない、一般の社会人や家事手伝いに取材した特集の最後のトピックスがフローチャート式になっていて、自分の特性の「日比谷線タイプ」に「……一見屋の他所目には見えない品格がポイント」と分らないような囲み記事がされていたのを忘れずにいたので、さも正解のあるマークシートを塗り潰すみたいになっつけ借りしたのだった。DVDメニューから『雨の日、路地裏、通りに面して』というS & a m p ; Gの未発表音源にありそうなキャプチャーに飛んで鑑賞を始めてから、心中ずつと飽き飽きしている自分を騙し騙しロツキングチェアーに揺れながら字幕を追いかけている内に、時機良く画中の女が空のバスタブで浴びていたシャワーの蛇口を締める音がした後、半開きのシャワーカーテンから肌に密着したカットソーに毛玉のたわわなショーツだけで出て来たので、着ていた服の上下のコントラストの濃淡から「ああ。女が着てすぐ脱ぐ時の“粗相”ね。シニールレアリスム。分かるわ」と勝手に見込んで、耳朶にイヤホンを嵌め字幕を消し、そのフランス女優とやや出目金で唇の分厚な三枚目のフランス俳優の不明なフランス語会話に出鱈目な吹き替えを聴いて、清美はマスターベーションを始めた。が、指を蠕動させたそばから薬指に少し時間が置かれた天然モイスチャーケアの名残の湿り気を感じると慌てて音声をミュートに切り替えて、画中の女優もよく知るところの女に変わった。舞台は日本のお城で二の丸とか三の丸と呼ばれているような場所から火の手が上がり、四囲を煙幕が覆った。と其処に、自分の近習（きんじゆ）を一掃して曲者が現れた。おおよとという間に担がれ、運ばれ、渡ってすぐ跳ね橋は上がり、栗毛で鬘（たてがみ）が白黒だんだらの馬の背に、何故か白無垢の打掛を一枚羽織っただけのうつ伏せた資格好で抛られて、姫攪（きん）いの方でもまた袴（かみしも）の半身は開けながら大弓をケンタウルスに構えた珍奇な姿をして、鳴り鏑の一矢で二人も三人も射落とした。追っ手は櫓からまた犬走りからお堀に落ちて男前にK I S S T H E S K Yした。いつか遠くの方で瀑布（ばくふ）と思わしき水の飛沫いた（しぶいた）音のはらはらと聞こえる、森（しん）とした春

の日の木立の中に拉つ去られていた。顔に傷が付かない程度の速度に“して”清美は繫縛されたまま落馬した。“藪の中”を一散に走った。森全体が無声で自分の息する音すらそうだった。ただ木漏れ日の太陽モニタージユみたいに忙しく、森が林になったり林が森になったり、まるで木立がまばたきをして清美を視ているみたいだ。目眩を覚えて避難した木下闇は外の世界とは打って変わり、鳥や昆虫が起てる色々な音で溢れていて、見つけたのか見つけれたいのか分からない世界だった。と其処に、煤けた肌に抜き身のような齒列が白く映えた男が現れた。おおよという間に跨がれ、脱がされ、てもう続かない。清美の実際的で且つ実用新案に遠い世界の人間はその先へ逝くのを許さないのだ。と、自分では思っている。ジッパ―に毛を巻き込みそうな窮屈な姿勢を整し、厳ついガラスケースに収まっていたセブンスターを喫みながら、もっと充実した没交渉的アフターケアの為に説明が急がれるような気持ちで思案を廻らしていたが、頭の“実際”の足りない場所では、サントラに問題がありそうだと見当を付けている。

打ちっぱなしの壁とモダン調な配色の建て具とで全体が家具化した、地上一階地下一階のカラオケ店に、ジョージとマーサーと彼女のアメリカ時代からの日本人の女友達と彼女の彼氏とその二人の友達の清美の五人が集まった。半袖のポロシャツにデイッキーズのカーキ色のチノパン姿を、オフィシャルなジーンズ地で裾長のエプロンで隠した女性店員が、キャビネットのティップingleバーとキャスターを上手に繰りながら、地下一階の御一行向けの部屋に四人を案内した。照明の点いた引き戸のキャビネットの中には、小袋の未開封のポテトチップスと、チロルチョコ三つと、のど飴がたくさん盛り込まれたのが予めサービスで用意されていて、特にのど飴がマーサーを喜ばせた。他にキャビネットのステージ上には、タッチパネル式のリモコンとオプション料金表と余興用のアイテムと紙おしぼりを入れた大きなバスケットが置かれていた。同フロアーのアプローチに設けられたセルフのドリンクバーに、日本人の女の子の彼氏が自分で使いに立つて行って、ペプシコーラ×2とQooオレンジと牛乳屋さんがつくったコーヒー牛乳を入れたグラスを、三本の指で支持した銀盆に載せて入室すると、既に歌唄いのオーダーが決まっていた。牛乳屋さんがつくったコーヒー牛乳は、清美と彼女の友達の日本人の女の子の二人で飲むのだ。

——もしも君が野球少年だったとして、しかも君のいるチームが九人の選手とスタッフだけで構成されているとしてだね、ライハばちでスタメン登録なら、ねえそれが君ならどう思う？リトルリーグなんかじゃなくて、軟式の少年野球くらいだと、投げるのがうまいりや打つ方もそこそこ通じちゃうんだ。エースで四番なんて奴。それが本式でやっているチームじゃ、九番なんてピッチャーが務めるものなんだけどさ。だから地元で半農家をやって口を糊する脱サラ親父や、近所の理髪店のマスターとかなんとかが総監督をやっている、

軟式の少年野球というならまだ、九番打者でスタメン出場といったって、一番バッターに繋げる云々と周囲まわりも一緒になつて持ち上げてくれるもんなんだ。納会なんかでの父兄の面子なんかもあるしね。それがライトで八番。ファーストアウトはお前次第なんて声掛けされるんだぜ。そりゃあ五十メートル12秒台で非力なガキばかり集まった試合じゃ、センターオーバークラスの打撃でランニングホームランなんかまずお目に掛かれないがね。つまり僕が言いたいことは、『グラント挨拶』なんてうんざりしちゃうよなっつて事なんだ。河川敷のグラスホッパーフィールドー

マーサーがモニターの前に立ち、出鱈目にタンバリンを振りながらアカペラで唄う、黒夢の『Night & Day』のAメロ終わりとサビ終わりと“間奏”と曲終わりとで、清美が律儀にやんやの合いの手を入れていた。その間中ずつとジョージは、両足で裏のリズムを正確に刻んでいた。が、小心なのに堪え性のない彼の、マーサーの日内変動がパニックウオッチみたいに乱れた、かつまた、チャイルドライクな脱アメリカンアイドル的のパフォーマンスに、日記を盗み見されたような含羞ハニカミが巧みな2バスを手伝っていた。というのは、ふたりが仮住まいするウィークリーのアパートには、スチールで組み立てられたシングルベットとその他一式が用意されていたが、マーサーが無印で買った持ち込みのシーツを敷き、そのシーツの皺を中央に寄せて、画した場所を各々（めいめい）の領分と決めていた。それでもいつも彼女の寝息が起つ頃には、そんな約束は当然に霧散して、シーツ皺の障壁は音無に崩れた。ジョージにとつて大問題なのは、彼女のすね足がまるで“生き物”ように、一寸ためし五分ためしと可塑かそくき的にふたりの足を組んずほぐれつさすことだった。或る夜は彼が鞘走り、彼女の襟足に蚊ほどのキスをする、マーサーはジョージの大腿を甚く（いた）抓つかった。また違う夜は、組んずほぐれつしたふたりの足を、彼が嫌になつたように退けると、翌朝になつても彼女はなかなか口を利こうとしなかった。彼が不思議なのは、抓られた夜が明けると、マーサーはひどく恐縮したよう

でいて、常よりも軽口を飛ばすことだった。だから今日もマーサーが、清美とこの店で待ち合わせる前に立ち寄ったコンビニで、ミチコロンドンのコンドームを日本人の女の子に軽口を飛ばしながら三セットも大人買いしたのが、釣り堀で撒き餌にパクつかざるおえない魚のような、ジョージが自分を一山幾らの人間なのだという気持ちになるように落ち込まずのであった。日本人の女の子が「My Revolution」をマーサーにリクエストして、ほとんどワールドスタンダードまで様式美化したかのような献杯の挨拶よろしくの譲り合いを経過して、結局デュエットすることに決まった。最初のサビ終わりからウゝアースに入ってほどなく、ジョージが頭を振^{かぶり}りながら、リモコンでアーティスト検索して、Cheap Trickの「I Want You to Want Me」を予約に入れた。「確かに。ユーモアがすべて」と彼は独りごちた。大モニターに待ちの曲目とアーティスト名が掲示されると、いつからか、そぞろ歩いていた清美の意識が“cryin, cryin, cryin, cryin,”とコーラスと一緒に連れて彼女の元に帰ってきた。それはライブ盤「At Budokan」に収録された「甘い罠」の、日本人の女の子たちの嬌声だった。そこに彼女の母親もいたのだ。今現在、五十を前にして清美の母は、上はスウェットに下はスパッツに重ねて三本線のジャージを履き、首に広告のないタオルを巻いて、専ら緑のある住宅道路を緩急自在にウォーキングしたり、ぬれ縁台とスタンドが置かれたウツドデッキに、ポロシャツとローライズのハーフパンツにバックバンドのついたサンダルを履いて出て、そこに植えられたゴムの木やゼラニウムに声掛けしながら水を遣り、そうかと思うと五色で刷られたハローマートのチラシに忙しく目配りをするのだった。今日の夜清美が自宅を出る間際になってから、父親が彼女に近付いて来て「小銭がたくさんで邪魔になるから」と、二千円札の上に兌換して三千円分くらいの小銭を載せて清美に持たしたのを、母親が耳だけで目敏く見つけて、ふたりから遠くの見えない場所から「あら久しく二千円札なんて見掛けてなかったわね」

と、どこかで聞いたことのあるような事を言ったのに、「でもママには内緒だよ」と早口で父親が続けて言った。清美が牛乳屋さんがつくったコーヒー牛乳をストローで余瀝^{よれき}まで飲み干すと、友達の日本人の女の子に言った。「こういう時ってーでもしばしばあるわー私以外の家族が、本当は派遣されて来た劇団員か何かで、立派なお金を貰って、本読みなしで割り当てられた台詞を順々に話しているんじゃないかと思うの」自分ではちっとも可笑しくないのに清美は笑った。「でもそういう家族っていいな」日本人の女の子が言った「それにそういうパパってかわいいと思うわ」清美は今度は本当に可笑しくなって笑った。もしも自分が日本人の女の子の立場だったら、同じことを言ったに違いないと思うからだった。「甘い罠」の原題が「I Want You to Want Me」と清美が知ったのは、母親と全く時を同じくしてだ。CDのヒットチャートに、ヒップホップやR&Bが当たり前前にランクインするようになった頃、母親が廉価でターンテーブルが出回っていることを昼のワイドショーで知って、清美の部屋の天袋に愛蔵していた懐メロのレコード盤を引っ張り出してきた中に、「At Budokan」があったのだ。折しも清美がJ-POPから逃げて洋楽に目覚めた時期と重なって、CD機能とアンプ内蔵の豪華セットのターンテーブルを通販で購入し、「甘い罠」も聴いたのであった。そしてその邦題の方を、いま清美は気に入っているのだ。それは“アレ”のサントラに相応しいタイトルだからだった。結局清美がロッキングチェアに座り、マスターベーションに深け込むのはずいぶん日を更新してからだった。その日拉つ去られた春の日の木立の中が、ジョージの吸うKOLLの薄荷の匂いが瀾漫して思い出されたのを、誰よりも先に自分に内緒にする清美ではあったのだけど。

「それ」日本人の女の子の友達の彼氏が言った「先輩がね。食介した時に、利用者さんを顎で指してそう言ったんだ」首をすくめ肩を聳やかした彼は、本当の年齢よりも老けて見えたとし、また、そういう風に見せるのに日頃から余念がなかった。「老老介護」日本人の女の子の友達が薪を焼べるように言った「朝令暮改、周章狼狽、頑迷固陋、“老”壮気鋭」彼が引き継いで言った「前掲の四つの四字熟語と、次の医療・福祉現場の、特に六畳一間の休憩部屋で開催される、秘密の申し送り用の隠語とを線を引いて結べ」彼は自分で引き受けて言った「認知症、措置制度、アイスノン対応、とそれから……」部屋内は今ではもうすっかり宴が引いたように閑散としていていつからか別室より誰かの節回しが漏れ聞こえていた。今こうして言葉に詰まってみると、子供時分に、かりそめにひとりタクシーに置かれて、母親の帰りを待たされた時のような心持ちになった。それは大衆浴場の湯船の中で、ジャグジーで湯が泡立つ音や、タイル壁で隔った女湯で不意に転がり落ちた石鹸箱の玩具の鼓笛隊が行進するような音や、曇りガラスの向こうの脱衣所に流れる音楽が、一絡げにまとまり乳色の靄を破って聞こえて来たように、いちいち大きい業務用器具や調度品の渋滞の為、物影の短く刈られていて、人の通り道が反射的利益で決まった部屋に、不明瞭な歌声が闖入して来たのだ。

……たとえ山彦のまやかしのからくりを知っていても、谷底に落とした言葉の音節の内のたまさか或る音が、先達の音とは岩肌の当たる場所を違えたり、梢の微妙な間隙の縫い方や、風の筋書きのない運び方など、そういつたくさぐさの働きが作用して遅れを取り、その為に自分では覚えずに落とした言葉と拾った言葉とが意味を変えていたら、やはりぞっとしないだろう。それに脱落した音が、必ずしも直ぐに正体を失うとは限らないのだ。またそのことの方が余

計に恐ろしいのだ。

……。BASSのスピーカーの子機が、天井の角隅に音無で吊るされていた。音の出口というよりかは、ずっと入り口という風だ。日本人の女の子の友達の彼氏は、マイクスタンドをスピーカーに向ける一杯に伸ばし、膝関節みたいなマイクの置き場所に、器械運動よろしく片足立ちして、手はメガフォンの形を作り、あのメッシュ地ですきつ齒な“口”に大喝してやりたくなかった。この部屋にいるみんながみんな、どこか変調をきたしはじめていたのだ。マーサーはチップスの塩気で口の端を赤くして、指の縁を頬と鼻の間の窪地まで何遍も滑らしていたし、ジョージは炭酸に飽きて、コーヒーを新しくドリンクバーまで取りに行ったかえりに、席をそれまで座っていた人中にあるコーナーから、離して置かれた“コ”の字型に画されたソファアの底辺の二、三人向けの席に移った。そうしてタバコといっしょに微糖のブラックコーヒーを喫んでいたが、今度は口臭が気になって、欠伸が出るのを抑える振りをしては、吐いた息を酸で融いて調えるように嗅いでいた。清美はジョージが空けたコーナー席の、カーブする背もたれに、自分の上半身を仰向けに預けてラメを縷々と流した黒色のガーターストッキングを履いた足は、浦瀬の岩に安む人魚よろしく、胡麻豆腐をミキサーでペーストして左官したような地合いの床にくつろがせて、思案顔で忙しくメールを打っていた。が、不思議にマライア・キャリーが好んで、カメラに向かつて自分の左半身を手前に出しそこだけを撮らせている、といった都市伝説かウィキペディア等級の不確かな情報を思い出し、一人で可笑しくなった。それから日本人の女の子の友達は、携帯したペットボトルの容器に、275ml入ったミネラルウォーターのわずかな量を吸い上げて、縋ったストローの包装紙に点滴し、それが戻してしていくのを、大真面目に閱していた。これから先、元彼が元夫が亡き夫が“やもめ”か、その内のどの肩書きを拝命しても、他人に思い出されるのは、今この時の肩書きであつてもらいたい。今この時じゃなく、肩書きの方を余計に。日本人の女の子の友達の

彼氏は、三文判よりももつとおあつらい向きな、瓶の底にラベルで貼付けるのに丁度いい、ユーザーネームがブラジル人サッカー選手の登録名のような肩書きが欲しかった。ほんの少しだけ、彼女に飽きていたのだ。タバコやコーヒーやましてやアルコールなどといった嗜好品を、生活に佩て持たない彼は、たまゆら、シフトの都合や有給消化で2、3日の連休があると、腺病質の食中りと同じ理屈で、かえって健康を損なうのだった。「僕はそのうちに彼女のことを『あれ』とか『それ』とか呼んで、人に紹介するようになるのだろうか」日本人の女の子の友達の彼氏は、朱墨で添削するように意識で吹き替えた「僕はそのうちに彼女のことを、人気マンガのキャラクターをフィギュア化するように、独占していた或る可能性を、シェアしようとしているのではないだろうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403e/>

Something New

2011年8月6日12時00分発行